

令和元年度文部科学省
青少年の体験活動の推進「自己肯定感向上プロジェクト」

**創造的なダンスを用いた、
児童青少年の自己肯定感向上プロジェクト2019
報告書**

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

はじめに

ここ数年、当団体においても学校など教育現場や児童福祉施設等との連携により、児童青少年を対象に創造的なダンスを用いた活動を継続して行っています。そうした現場の振り返り(活動後に関係者間で行う感想の共有と意見交換)で、先生や施設担当者から子どもたちの自己肯定感についての話を耳にする機会が増えています。背景には社会的な要因や家庭環境の問題が透けて見える事も多々あります。

本プロジェクトは、2018年度に続き2年目となります。子どもたちの自己肯定感の向上に創造的なダンス(コンテンポラリーダンス)が活用できることを具体的に明示し、ダンスの力をより社会に活かす道筋をつくれないかと考えたのが、プロジェクト始動のきっかけでした。

2014年から京都市東山区で6年継続してきた「こちかぜキッズダンス」の活動実績をもとに、本プロジェクトでは、何かしらの理由で創造的なダンスに出会うことが難しい子どもたちがいる場所へ体験活動を拡げる機会とするとともに、推進会議にて教育研究者や教員、アウトリーチ先の担当者と文化施設の担当者も交えて、ダンスによる活動の社会的意義や具体的な連携方法を話し合う場を持ちました。更に、ダンスによる体験活動の第三者評価のひとつとして、新たな手法を用いて体験活動の一部を調査・分析する事も試みました。

この報告書には、2019年度の体験活動・推進会議・調査分析それぞれの方法・プロセス・感想・評価などを記し、今後様々な現場で活用するための道筋や展望を、できる限りまとめました。将来的に、ダンスを用いた体験活動を、ダンスのアーティストやコーディネーターが、地域の方々や自治体等と連携して実施できるように、微力ながら推進していきたいと考えています。

2016年、沖縄のある小学校でダンス体験授業を行った時のことです。この時の担任は、創造的なダンスの可能性を見抜いてこう話されました。「身体はうそをつけない。ノートも机も、隠すものが何もないから、体一つで勝負しないといけない。他の教科と違ってすぐ数値化できるものじゃないけれど、それ以上の人間力が身に付くと思う。」SNSが普及し、子どもたちが小さな機械に振り回されダイナミックさを失いつつある、とも伺いました。そういう時代だからこそ、人としての原石が磨かれる機会はたくさんあってほしいと願っています。

2020年3月吉日

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

創作ダンスの持つ力をどう測るか？

今年度の推進会議は、実践事例の報告を中心に進めるという形を取り、そこで出された報告者や各委員からの発言を踏まえて改めて自己肯定感の中身に迫り、それを基に自己肯定感を測る尺度を定めて、それらのことを調査研究にも生かす、という計画を立てました(様々な事情で計画通りにはいきませんでしたが、しかし、このアイデアは、自己肯定感の測度を、創作に関わったダンサーへの聞き取り調査によって決める、ということにつながりました)。

実践報告では、創作ダンスが教科に取り入れられている学校教育の事例と、児童福祉(児童養護施設での取り組み)や更生保護(受刑者への取り組み)の現場からの事例が取り上げられました。

まず、堺市の小中学校での取り組み事例では、創作ダンスを学校教育に取り入れることの意義をよく理解した、他校の先生をも含めた先生同士のつながりの強さ、それによる価値観の共有に深い感銘を受けました。また、ダンサーとの協働の仕方も特徴的で、ダンサーによる授業のない日にも、先生がダンス創作に関わっているということでした。こういう関りが重要なのは、お互いの存在が影響し合い、教師は教師の側で、ダンサーはダンサーの側で、それぞれ自分の仕事への問い掛けが増え、お互いのよさを発見して取り入れ、磨かれるということだと思います。

これと対照的だったのが更生保護分野での実践報告の1つで、担当者の孤軍奮闘ぶりが伝わってきました。それと同時に、人と人をつなぐことの必要性、そうした役割を担うダンスコーディネーターの重要性も強く感じましたが、もう1つ印象的だったのは、ダンス創作の場は、表現という枠組みを通して見ると、その個々人が置かれた状況によって規定されることを超えて、一人の人間として尊重されることのできる場が出来る、ということでした。

3つ目の児童福祉の事例は調査報告に詳しく掲載されていますので、ここでは省略させていただきますが、以上3つの現場からの報告からは、学校教育以外の現場でも、あるいはダンスが社会的課題に対しても、有効に働く可能性のあることを示唆していると感じました。

一方の調査研究に関しては、データ数の問題等で既定の測度(尺度)を用いた統計的分析(t検定や分散分析などによって有意差を見出す)によるアプローチが困難なため、違う方法を用いることにしました。それは、創造的なダンスがもっている力を、まさにその力が発揮されるそのことそのものを、それが可能な限り損なわずに捉えようとする試みで、それ故、その力が働く場の特殊個性性といった、生のままの状態が尊重されることとなっています。この一回性に留まるともいうべきアプローチは、客観妥当性や普遍性に欠けるように見えるかもしれませんが、そうではなく、創作ダンスのもつ力の本質を、正面から解明しようとする試み、その端緒であると理解していただけると幸いです。

京都市東山青少年活動センター シニアユースワーカー
推進会議委員長 西田尚浩



こちかぜキッズダンス 2014



こちかぜキッズダンス 2015

目次

06	序. プロジェクトの目的、組織体制
	1. プロジェクトの目的
	(1) 推進会議の構成
	(2) 推進会議の月日・場所・内容
	(3) 調査・分析の実施体制
	(4) 体験活動およびプロジェクト事務局体制
09	I. 創造的なダンスを用いた体験活動の報告・評価
10	1. 母子生活支援施設A ダンスワークショップ2019
13	2. 出張ダンスワークショップ① 京都府警察 少年サポートセンター
16	3. 出張ダンスワークショップ② 大津市立北大路中学校
19	資料: 体験活動アーティストプロフィール
21	II. 体験活動の調査と分析
22	1. 調査の対象・方法・倫理的配慮
	(1) 倫理的配慮
	(2) 調査対象
	(3) 調査方法
	(4) 母子生活支援施設Aでのダンスワークショップの調査に用いた具体的方法
23	2. エスノメトリー法による調査結果
	(1) 全回の6つの指標の短期的及び長期的変化
	(2) 開始後5分間の6つの指標の長期的変化
26	3. 調査結果のまとめ
26	4. 補足説明
29	5. 本調査の意義と課題
30	資料: インタビューデータ
41	III. プロジェクト推進会議の記録
42	1. 推進会議の目的と概要
42	2. 第一回推進会議 議事録「小学校・中学校での創造的なダンスの活動」
49	3. 第二回推進会議 議事録「児童福祉施設での創造的なダンスの活動」
54	4. 第三回推進会議 議事録「更生保護と創造的なダンスの活動」
60	資料: 推進委員プロフィール
61	資料: NPO法人JCDNによる体験活動の主な実施状況
62	おわりに

※文中の肩書・所属は2019年度当時のものです。

※個人名は敬称略。

※本書の作成にあたり、様々な団体・個人のご協力をいただいております。無断使用・転載はご遠慮ください。

JCDN(裏面のメールアドレス)までご連絡いただけましたら、用途に応じてご相談に応じます。

序.プロジェクトの目的、組織体制

1. プロジェクトの目的

現代社会においては家庭でも学校でも児童青少年が自ら考え創造する、表現する機会が不足していると言われるが、とりわけ社会的課題を抱える児童青少年にとってそうした機会の不足は発達の保障という点で大きな問題であると言える。こうした状況を踏まえ、NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)は、平成23年頃以降現在に至るまで、授業やダンスワークショップを全国の小中学校(特別支援学校を含む)や保育園、児童保育所等で行ってきた。

ダンスの特徴は、言葉や道具がいらないこと、どこでも誰でもできることにある。特に創作ダンスは、教えるダンスとは異なり、一人一人のアイデアを活かす活動であるため、それまで知らなかった友達や自分自身のよさを発見するなど、学ぶところの多い活動である。創作ダンスは子どもたちの創造力・想像力・コミュニケーション力を育む可能性を持つが、これらの力は人が生きていく上で不可欠な力でもある。ダンスを通じて、自分に自信を持つ、友だちを作る、心を開放するなど、児童青少年の心と身体の健康な成長を促すことができるならば、諸外国と比べて低いと言われる子どもたちの自己肯定感の向上にもつながるはずである。

将来的にはダンスを用いた体験活動そのものを自治体や教育委員会等が主導して実施できるようになることが望ましいが、JCDNとしては、これまでの実績と専門性を活かし、そのノウハウを伝える形で、ダンスの力を社会に活かしていきたいと考えている。

2018年度には同様の自己肯定感向上プロジェクトの枠内で体験授業を実施したが、実施場所となった施設の担当者たちからは、「(少年たちは)いつもの活動では下を向いたままな事が多いのに、ダンスではとにかく笑顔が見えた。これまで行った体験活動の中で一番良い活動になった。自己肯定感を向上させること、そのために必要な「ほめる」という事を、ダンスは触れ合いながら上手に言ってあげられる活動だと感じた」、「ダンスの方がコミュニケーションが取れる。普通のスポーツでは味わえない身体の接触があるからではないか」(少年サポートセンター)、「みんな昨年とは表現の仕方が全然違う。今年のダンスの特徴もあって、自分の表現をしていた」(「こちかぜキッズダンス」)、「男女関係なく小学生から中学生まで一つの事に取り組めたのは初めてで、すごく大きい事だった。それが子どもたちの自信にもつながっていった」(平安養育院)等々の肯定的な評価を得ることができた。プロジェクトを実施したナビゲーターたちからも、子どもたちの変化や成長に関する豊かなコメントが得られた。

他方で、そうした評価を裏づける統計的データは得られなかった。2018年度は「こちかぜキッズダンス」他すべての体験活動においてIKR評定用紙を用いたアンケート調査・分析を行った。その調査・分析の結果は、創作ダンスへの参加と自己肯定感の向上と

の間に統計上有意な関係を示さなかったのである。その要因として、言語による回答が難しい低学年の子どもが多かったこと、アンケート調査を行う大人に対する試し行動があったのではないかと推測されること、そもそも被験者の数が限られており量的評価に適していないこと、などが挙げられた。プロジェクト推進会議でもそうした見解で一致し、ダンスや芸術の活動に適した評価方法の開発の必要性が共通の認識となった。こうした経緯を踏まえて、2019年度は、創造的なダンスや芸術分野の取り組みによる自己肯定感の向上を測定することのできる有効な方法の開発をもプロジェクトの柱の一つとして位置づけるに至った。

以上より、2019年度のプロジェクトでは以下の2つの目的を設定した。第1に2018年度に実施した類似事業の内容と課題を踏まえ、創作ダンスを用いた体験活動を実施するとともに、新たに開発した評価方法によりその効果を検証すること、第2に、社会的支援が必要な児童青少年を対象とする体験事業の実施先を新たに開拓し、社会的課題に取り組む諸団体と芸術団体が連携し、自己肯定感の向上に資する取り組みを実施していくモデルケースを構築することである。

2. プロジェクト実施のための組織体制

(1) 推進会議の構成

このプロジェクトでは推進会議を設け、会議で出された見解・提案を活かしながらプロジェクトを実施した。推進会議の構成は以下に示す通りである。

[委員長]

◎西田尚浩:公益財団法人 京都市ユースサービス協会 京都市東山青少年活動センター シニアユースワーカー;同センター元所長。長きにわたりダンスプロジェクトを実施。

[委員]

◎北尾優樹:京都府警察本部生活安全部少年課 少年サポートセンター相談支援・主査;H30当プロジェクト 出張ダンスワークショップ 少年サポートセンター担当者。

◎藤川信夫:大阪大学大学院人間科学研究科 臨床教育学講座 教育人間学研究分野教授;教育人間学、教育哲学、教育思想史。ドイツ中学校教育におけるアートの活用に関する研究がある。エスノメトリー法の開発とエスノメトリー法による測定・分析。

◎伊藤駿:NPO法人日本教育再興連盟(ROJE)スーパーバイザー、日本学術振興会 特別研究員;子ども・学校の課題解決を目指す各種支援プログラム、放課後学習活動の実施、教育社会学者。

◎**沼田里衣**:大阪市立大学都市研究プラザテニユアトラック特任准教授、音遊びの会、おとあそび工房主宰;知的障害のあるひとととの多様な音楽活動を継続実践、研究。

◎**内田桃子**:一般社団法人桃李教育会 代表理事、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程在籍;コミュニケーション能力育成に特化した学習塾の運営、教育心理学系調査の統計分析担当。

◎**渡邊和也**:大阪府堺市教員/堺市立浜寺小学校勤務;H29・30年度文部科学省「文化芸術による子供の育成事業」の実施校、担当教員。

◎**竹内香織**:公益財団法人 京都市芸術文化協会 事業課長;京都芸術センターが実施する学校へのアーティスト派遣事業「ようこそアーティスト」を担当。

◎**岡本卓也・蔵田翔**:京都市東山いきいき市民活動センター 館長、職員;「こちかぜキッズダンス」の共催者。まちづくりの現場におけるファシリテーションを専門にする。

◎**岡崎弘、西本翔馬**:京都市三条学童保育所 所長、職員;「こちかぜキッズダンス」の主な子どもが通う学童保育所の先生方。

◎**隅地茉歩・阿比留修一／セレノグラフィカ**:ダンスアーティスト;「こちかぜキッズダンス」「母子生活支援施設Aダンスワークショップ」のダンスの講師。他に全国各地で同様の体験活動の講師として活動。

[オブザーバー]

◎**倉谷誠**:京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化芸術企画課;京都市「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」を係長として担当。

(2) 推進会議の月日・場所・内容

P.44「推進会議の概要」を参照のこと。

(3) 調査・分析の実施体制

調査責任者:内田桃子(大阪大学大学院人間科学研究科・院生)

エスノメトリー法の開発者および本調査における測定・分析者:藤川信夫(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

(4) 体験活動およびプロジェクト事務局体制

全体責任者:神前沙織(NPO法人JCDN チーフ・コーディネーター)

◎**推進会議担当／小泉朝未**(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在籍;京都市「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」の調査・研究を担当。)

◎**体験活動担当／鈴木英理子**(ダンサー・ファシリテーター;「母子生活支援施設Aワークショップ」アシスタント兼コーディネーター)、**新原怜**(JCDN)



こちかぜキッズダンス 2016



こちかぜキッズダンス 2017

I

創造的なダンスを用いた 体験活動の報告・評価

1. | 母子生活支援施設Aダンスワークショップ2019 |

母子生活支援施設Aの子どもたちとのワークショップ

〔活動場所〕

母子生活支援施設A
〈京都市〉

〔実施期間〕

平日の場合は17:00-18:00、
土曜日の場合は14:00-15:00に実施。

1. 10月11日〔金〕 N: セレノグラフィカ A: 花沙、鈴木
2. 10月19日〔土〕 N: セレノグラフィカ
3. 11月2日〔土〕 N: セレノグラフィカ A: 鈴木
4. 11月8日〔金〕 N: セレノグラフィカ A: 花沙、鈴木
5. 12月14日〔土〕 N: 鈴木 A: 高橋、塩見
6. 12月20日〔金〕 N: セレノグラフィカ A: 花沙、鈴木
7. 1月17日〔金〕 N: セレノグラフィカ A: 花沙、鈴木
8. 1月18日〔土〕 N: 花沙、鈴木 A: 塩見
9. 2月 8日〔土〕 N: 花沙、鈴木 A: 高橋
10. 2月14日〔金〕 N: セレノグラフィカ、花沙、鈴木

※N: ナビゲーター A: アシスタント

〔実施メンバー〕

ダンスのナビゲート:
セレノグラフィカ(隅地菜歩・阿比留修一)
アシスタント:
花沙、鈴木英理子、高橋芽生子、塩見めい子
コーディネート:
神前沙織、鈴木英理子
オブザーバー(協力):
倉谷誠(京都市)

〔ワークショップに参加した子どもたち〕

母子生活支援施設Aで生活している1-6年生の子どもたち
延べ20人

実施内容

経緯・背景・打ち合わせ

母子生活支援施設Aは、18歳未満の子どもを養育している母子家庭、またはさまざまな事情で離婚届ができていないなどの母と子が利用できる児童福祉施設で、DVなどの深刻な状況に置かれた母子を一時的に保護するシェルターでもある。

今回、京都市の倉谷氏を通じて当プロジェクトの体験事業の連携先として紹介を受け、母子生活支援施設Aで生活し、学童保育を利用している小学1年生から6年生を対象にワークショップを行うことになった。

学童保育の取り組みとして、毎年2月に行われる京都市児童施設育成事業推進協議会主催の「文化の集い」にて、過去5年ほど、ステージ発表でよさこいを披露してきた経験から、施設としては、身体を動かすことによるプラスの要素に着目しており、継続してプロのダンスのアーティストに関わってもらう機会を望んでおられた。そのため、実施回数を増やして重点的に取り組む事とした。

また、今回のワークショップを通じて何を達成目標とするか、「文化の集い」に向けてダンス作品を披露するのが良いのかどうかを検討。初めての取り組みであることから、まずはプロジェクトメンバーと子どもたちとのコミュニケーションを大切に、様子を見て判断していくことにした。また、毎回のワークショップ後に、プロジェクトメンバーと施設職員で振り返りの時間を持ち、ワークショップ内容だけでなく、子どもたちの普段の様子や性格などをシェアすることにした。

ニーズ(子供の様子や、このワークに期待されることなど/聞き取り内容のまとめ)

非常にデリケートな家庭事情もあり、自己肯定感が低い子が多い。また見通しが立たないと活動に参加しにくい子どももいたり、集中力が続かない子がいたり、さまざまな子どもがいる。同じ場所では生活していることもあり、兄弟のような関係性があるようにみえる。これまでよさこいに取り組んできた子どもたちには、決まった形がなく、自由な表現ができる新しいダンスに出会ってほしいと思っている。学校や学童では行動を制限されてしまうことが多いが、このワークショップでは自己を解放する喜びを体験し、自己肯定感を高めてもらいたい。

プラン(10回のワークの計画など)

セレノグラフィカのふたりがメインでダンスのナビゲートをする。不在の日にはアシスタントがナビゲートを担当する。初めての場ということもあり、子どもたちとプロジェクトメンバーがお互いを知り合い、新しいダンスの表現に興味を持ってもらえるようなワークの進め方をする。最後に成果発表を目指すかどうかは、子どもたちの様子を見て判断する。結果として、最終回は成果発表は行わず、代わりに、ナビゲート、アシスタントが各自のワークを持ち寄り、順番にこれまでのワークのおさらいしながら、その場にいる人全員で踊る時間を大切にしたい。

〔ワークショップの例〕

◎スーパーストレッチ——全身がストレッチできる動きをする

◎スーパートレーニング——オリンピック選手やアスリートも行っているトレーニング

◎ストップ&ゴー——音楽が鳴っている間は歩き回ったり・転がったり、自由に動く。音楽が消えたら止まる。

◎カラダの早口言葉——だんだんテンポが早くなる曲に合わせて、振付を踊る

◎カラダ伝言ゲーム——一列に並び、隣の人に動きを伝えていく

◎タッチゲーム——ペアになり、1人が手をいろいろな高さに差し出し、もう1人がその手にタッチする

◎風船パス——円になり、風船をパスしあう。小さなグループに分かれて円になり、手をつないだまま風船をパスしあう。

◎ウェーブダンス——横一列に並び、1つの動きを波のように順番におこなっていく

ワークショップ中の子どもの様子や変化

初回に子どもたちにウェルカムダンスを披露した時は、とても興味を持って見ていたが、ワークでは恥ずかしがる子が多く、緊張している様子がみられた。自己紹介では自分の名前を言うことを嫌がる様子がみられた。見通しが立たないと参加できない子、すぐ慣れて参加できる子など様々な反応があったが、10回を通して、それぞれのペースで参加できる場であるということを感じてもらう事ができた。

毎回の振り返りから感じられる、子どもの変化

◎2、3回目あたりから緊張感が薄れてきて、慣れてきたようで、プロジェクトメンバーに自分のことを話したり、よさこいを披露してくれたりと少しずつ仲良くなっていった。

◎ワークの内容を理解できない小さな子に対して、フォローしてくれる高学年の子がいて、生活を共にしていることから出てくる関

係性も見えるようになってきた。

◎中・高学年の男子グループがまとまって壁際にくっついてつんでいることが多かったが、回を重ねるごとに壁際にくつくことが少なくなってきた。グループの中心の6年生の男の子がアイデアマンなのだが、思いついたことは自分ではやらず、他の男の子に指示してやらせるという姿があった。指示される子も受動的な動きになっていたのも見られた。

◎女の子たちは低・中学年の子が多く、各々が自分のペースで参加できていた。中には運動量に物足りなさを感じ、最終回に「もっと激しい踊りがしたい」と言う子がいた。

◎金曜日と土曜日のワークショップでは、子どもたちの取り組み方が異なっていたのが特徴的だった。学校生活で疲れて帰ってくる金曜日は集中力に欠け、収集がつかない状態になることがあるが、ゆっくり休める土曜日はとても落ち着いていて、リラックスして取り組んでいた。この違いは日程の後半から顕著に現れるようになった。

◎学童の間では、「走り回ってはいけない」「裸足はいけない」「硬いボールを投げない」などの禁止事項があるが、このダンスの時間はそれをOKにしていることが、子どもたちはとても嬉しいようだった。この「強制されない」という安心感の積み重ねにより、最後の方は各々のペースではあるが、積極的に参加する姿や集中して取り組む姿が見られた。最終回のワークショップが終わったあと、全員が自分の言葉で感想を言ってくれた。

(報告: 鈴村)



母子生活支援施設A 金荷吾（児童支援員／ダンスワークショップ担当）

(1) 成長していく子どもたちに身につけてほしい力・伸ばしてほしい力

施設には、様々な理由により自分を受け止めてくれたという経験が少ない子どもや、自分の気持ちを伝えたり表現するという事が苦手な子どもが多くいます。そのため、人とのコミュニケーションにおいて色々な人とぶつかりあったり、自信の無さから諦めの気持ちが強く出てしまう子もいます。子ども達には何事にも諦めずに挑戦したり、自分の気持ちを上手に伝える力や相手の事を思いやる力を身に付け、自分も相手も大切に出来るような存在になってほしいと思っています。

(2) ダンスの活動を通して感じた変化など、ダンスの活動に関する感想

初めの頃は、子ども達の緊張が高い様子が感じられましたが、子ども達一人一人に柔軟に対応していただき、回を重ねるうちに少しずつ緊張感も解けていきました。普段は積極的ではない子ども徐々に興味を持つようになり、自ら講師の方と触れ合う姿も見られました。また、初めての事に取り組む事が苦手な子ども、今回の活動では自信を持って新しい事に挑戦する姿を見る事ができました。今回のダンス活動は子ども達にとって自分を表現する良い経験になりました。

ナビゲーター：セレノグラフィカ

これまでに経験してきた、他の児童対象ワークショップとはさまざま

まな意味で異なる体感のある施設であった。子どもたちに自分の名前を覚えてもらえるようになるのにも時間を要した。カーテンに隠れる。施設の指導員の先生たちの身体から離れない。壁にくっついて離れない。金曜夜の回と土曜日の回でもその場の空気感が異なり、子どもたちとの距離感は一進一退の感じが続いた。それでも、その中でも、ほんの少しずつ、身長を教えてくれたり、自分がハマっていることを打ち明けてくれたり、畳の目を数えるような出来事が増えていった。私たちが見ている間にはふざけていて、私たちが視線をずらすとちょっとやってみる、ということも目についた。警戒心というものを抱え込んで来ざるを得なかった身体との向き合いは、まだ当分続くと思われるが、今年度の最終回に初めて全員で踊る瞬間があったことに希望を持って進みたい。



2. | 出張ダンスワークショップ① 京都府警察 少年サポートセンター |

少年サポートセンターでの子どもたちとのワークショップ

〔出張先〕

京都府警察
少年サポートセンター
〈京都市東山区清水4-185-1〉

〔実施期間〕

職員対象に事前学習として体験ワークショップ
8月4日〔日〕 14:00-16:00
会場：東山青少年活動センター

少年のためのワークショップ

11月10日〔日〕 10:00-11:45
会場：西代里山公園（京都府長岡京市）

〔実施メンバー〕

ダンスのナビゲート：
東野祥子（8月4日）、康本雅子（11月10日）
アシスタント：
合田有紀（11月10日）
コーディネート：
神前沙織
オブザーバー（協力）：
西田尚浩（京都市東山青少年活動センター）

〔ワークショップに参加した子どもたち〕

体験WS：4名 少年WS：3名。
他に6人の大学生ボランティアが参加&サポート。

実施内容

経緯・背景・打ち合わせ

少年サポートセンターは、警察で取り扱った、家庭環境、学校、交友関係等に問題を抱えている少年、深夜はいかいや喫煙等の不良行為や非行のあった少年を対象に、各種体験活動への参加と、面接指導、学習及び就学・就労支援を通して、少年の非行を防止し、健全な状態への立ち直りを支援する活動を行っている。

少年サポートセンターの体験活動では、年間12本（月1本）の様々な体験活動を行っている。その中で、昨年度本プロジェクトと連携しダンスを取り入れたところ、想像以上の成果が見られたことから、今年度も連携して実施する事となった。また、当団体と「更生保護」の分野との連携実施モデルになる可能性も踏まえて、出張先に決定した。なお、担当警察官が昨年より異動があったため、1回目のワークショップは担当者を対象としたインリーチとして実施し、2回目に少年を対象としてワークショップを行った。

ニーズ（子供の様子や、このワークに期待されることなど／聞き取り内容のまとめ）

サポートセンターの担当官が実際に会ったりして関わったことがある少年たちで、現在支援している子供たちは、家庭環境に問題がある、自身に問題を抱えている、過去に非行を犯した、居場所がなく引きこもりである、自己肯定感が低い、といった課題を抱えている。

昨年度の実施例から、ダンスの活動を行う事で少年たちに自然と笑顔が出てボランティアの学生とも触れ合えるようになった。継続して実施する事でその効果を定着させる機会としたい。また、

少年の自立の助けになる事であれば、積極的に取り入れたい。

プランと子どもの変化

昨年度参加した少年たちがもう一度参加してくれることを期待していたが、1年経ち気分が変わってしまったのか、全員が「ダンスはもういい」と活動への参加を控えてしまい、今年は新たな少年を対象に取り組む事となった。

初めての少年に参加してもらうのに、「ダンス」というと振付があってそれを覚えるような、難しいものをイメージされがちであるため、誰にでもできる自由な動きをダンスにしていこうと、ゲーム的な要素の中から自然と動きを発見していく活動である点を強調し、より魅力的な活動に感じてもらえるよう、芝生の上で身体を思いっきり動かす事を提案し、芝生のある公園を活動場所を選んだ。少年の参加は3名とやや少なかったが、アーティストとボランティアの学生、そして少年サポートセンターの担当者、少年を送迎する警察官OBの方も含めると、それなりの人数になった。

少年にとって、芝生の上でリラックスしながらこうした活動に参加する事じたい、プラスになったのではないかと感じる。というのも、一人の少年は明らかに姿勢が悪く、日ごろからほとんど身体を使っていない事が見て取れたほか、目を合わせるのが不得意で、一緒に来た妹としか最初はコミュニケーションができなかった。もう一人は課題を感じる点はなかったものの、どちらかというと内気なタイプであった。

ストレッチから始め、だんだん動きの要素を大きくしていくと、当然すぐに息切れして「しんどい」と言うものの、やめずに最後まで

で取り組めた事と、終盤は1対1で目を合わせる事ができるようになった。終了後に担当者が用意してきたおにぎりを、とても美味しそうに食べていた様子から、この少年にとってはだいぶハードな運動とすがすがしい体験になったのではないかなと思う。

課題と展望

今回の課題は、何よりも参加者集めであった。少年サポートセンターの登録者数をもっと多数いる(2019年は147名)が、少年が活動に参加するためには、少年サポートセンター→府内の各警察署→登録家庭の保護者→少年 というように伝達する仕組みになっており、保護者の理解と協力も必要になるが、実際には家庭での親子関係そのものがうまく行っていないケースも多いそうだ。そのため、日頃から、少年サポートセンターの担当者や各警察署のスクールサポーターと呼ばれる警察OBの方々が、管轄するエリアの少年と直接コミュニケーションを取れるよう努力されているが、大人や社会を信用していないであろう思春期の子どもに、保護者の同意のもと、いかにして体験活動に参加してもらうのか、参加してもらうまでの過程が複雑で、なかなか課題は多いと感じる。

また、少年サポートセンターの担当者にはインリーチによってダンスの内容を理解していただけるものの、「ダンス」という活動が、サッカーや陶芸など他の一般的に普及している活動に比べて分かってにくく、インリーチを経験していない方には、利点や効果が伝わりにくい問題もあった。

連携実施モデルになる可能性については、ひとつには、本年度第3回推進委員会に少年サポートセンターの担当者に出席していただき、これまでのダンスの活動内容を語っていただいたのは、今後の連携を考える上で重要な機会になった。少年サポートセンターの少年に対する支援方法が見直しになっているとの報告があり、同じ活動は続けられないかもしれないが、一方、担当者の提案として、連携を図るうえで良いと思われる施設等を具体的に提案していただくなど、本会議において、連携の道筋を複数示していただく事が出来た。少年のために良い活動であれば協力したいとも言っていていただき、今後、できうる限り次なる展開を考えたい。

(報告:神前)

感想・評価

京都府警察本部 少年課 少年サポートセンター

相談・支援係主任 北尾優樹

(1)成長していく子どもたちに身につけてほしい力・伸ばしてほしい力

成長していく子どもたちには、悩んだ時に一人で抱え込まず、周りの人に相談できる力を身につけてほしいと思う。自分は一人ではないということ、たくさんの人に支えられて生きているというこ

とを理解し、悩みがあれば周りの人を頼り、打ち明けられる強さを身につけてほしいと思う。そして、自分を支えてくれている周りの人たちに感謝ができる人に成長してもらいたい。

(2)ダンスの活動を通して感じた子どもの変化など、ダンスの活動に関する感想

1回目のダンス体験活動で、活動開始時、座り込んで顔を伏せた



まま動かない女の子がおり、ダンスに参加できるのか心配をしていたが、いざダンスが始まると、他の子どもたちが楽しそうに体を動かしている様子を見て、自分もやりたいと思ったのか、途中からは楽しそうに参加していた。ダンスには見ている者にもやってみたいと思わせる魅力があり、私自身もダンスを体験することで開放的な気持ちになることができた。子どもたちが継続的にダンスに関わることができれば、考え方や行動も前向きになり、自己肯定感の向上につながるのではないかと感じた。

ナビゲーター 康本雅子

今回参加してくれた兄弟について、最初は覇気がなく話し方や目つきもとろんとしていましたが、全てのワークに特に嫌がる事なく参加していたので、環境が自分にとって安全地帯と分かれば、意欲や好奇心を出せるのではないかと思います。

人とのコミュニケーションが苦手な子にとって、実際に人と触れ合いながら体を動かすワークというのは自分を相手に預ける、相手の声を聞いて受け入れる、という意味においてとても有効なものではないかと思います。

場に慣れるにつれて少し楽しんでいるような顔も見られる瞬間はあったので、こういう機会がもっとあれば、人と関わる事に積極的になれるのではないかと思います。

自己肯定感と皮膚感覚というのは密接な関係があると思っています。幼い時に保護者や周りの人から沢山抱っこされたり優しく触れてもらったりする経験が、絶対的な安心感と共に、自分は愛されているという自己肯定感が育まれる基礎になるからです。そのくらい皮膚から得られる情報というのは大きく、人との接し方や信頼感は勿論のこと、人格形成にも影響を与えるものだと思います。

成長するにつれて、ただでさえ人との触れ合いが少なくなって

くる(家族ですらそうです)ので、一時でもダンスのワークショップを通して、人に触れたり触れられたり、一緒に体を動かすのは、とてもいい刺激になるのではないかと考えます。

ボランティアの学生

◎大人から子供と色んな人とペアを組んだが、組む人によって考え方ややり方が全然違うし、ペアを組んだことによってコミュニケーションが取れて良かった。(大学2年生/女)

◎想像以上に激しかったが、相手とコミュニケーションをとりながらできたので、子供たちと接しやすくなった。ダンスは一人でするものだと思っていたが、ペアを作って取り組む活動が多かったもので、とても楽しかった。(大学3年生/男)

◎運動が嫌いと言っていた子どもも、しっかりと体を動かしてストレスを発散していた。やはり体を動かすことは大切であると感じた。なかなか打ち解けられないかなと思っていた子どもとも、すぐに仲良くなれた。「よく分からないけど何か楽しい」と子どもたちと話していて、気持ちもなんだかスッキリした。ありがとうございました!!(大学4年生/女)



3. | 出張ダンスワークショップ② 大津市立北大路中学校 |

北大路中学校1年生の生徒たちとのワークショップ&発表

〔出張先〕

滋賀県大津市立北大路中学校
(大津市北大路3丁目22-1)

〔実施期間〕

教員対象の体験ワークショップ
10月4日〔金〕16:00-17:00
会場:北大路中学校

ワークショップ(校外学習授業)

11月6日〔水〕9:00-15:00
(うち、ダンスの時間は9:30-14:40)
会場:滋賀県立武道館 柔道場

〔実施メンバー〕

ダンスのナビゲート:

セレノグラフィカ(隅地菜歩・阿比留修一)

アシスタント:

鈴木英理子、西岡樹里、佐藤野乃子

コーディネート:

神前沙織、新原伶

〔ワークショップに参加した子どもたち〕

北大路中学校 1年生全クラス134名

(男子64名、女子70名)

他に教員7名が事前学習を受けて参加&サポート。

実施内容

経緯・背景・打ち合わせ

北大路中学校は、大津市の中でも比較的住宅街の密集する地域にあり、生徒数から考えても中規模の学校である。JCDNとは平成29年度に学校にアーティストを派遣する事業の枠組みでダンス体験ワークショップを実施した縁があり、教育分野で自己肯定感向上に資する取り組みに熱心な教員がおられることから、実施を決定。通常の授業枠ではなく、学年事業の校外学習にダンスを取り入れ、一人一人の自己肯定感向上を目指すとともに、生徒同士のコミュ

ニケーションを図る機会とした。

打合せでは、ワークショップが一年生134名全員の同時参加となり、通常より一度に活動する人数が多いため、担当教員を対象とした体験ワークショップを事前に行うことで当日は先生方に生徒のサポートをお願いした。また、学校側の実施のねらいは、活動を通じて「仲間を実感する」「自己表現力を実感する」「社会の一員である自覚を持つ」の3つを経験してもらうこと、学年単位で活動することでより大きな集団としての連帯意識や帰属感を高める機会にしたいということをお聞きした。

ニーズ(子供の様子や、このワークに期待されることなど/聞き取り内容のまとめ)

全体的に元気で明るい学年集団である。純粋で落ち着いており要領のいい子が多い。また、ゆっくり思考することよりも体を動かすことを得意とする生徒が多く、比較的活動的である。その一方で、例えば待つことを苦手とするなど、幼い子が多く、言葉で丁寧に説明する必要があることや初めて出会うこと、分からないことには物怖じしやすい。人とのコミュニケーションが苦手で、自分の思いを相手にうまく伝えられないという特性を持つ生徒も多く、小さなトラブルに発展することがある。自分なりに表現することを楽しみ、学級を超えて活動に取り組むことで学年集団としての意識の高まりや仲間の存在を実感してほしい。



プラン

始めにアーティストのウェルカムダンスを見てもらった後、自己紹介で、これまでの経歴やダンスに関わるきっかけなどをお話する。ワークショップの導入は、横になり、リラックスした状態で各々の身体に集中する時間を作るところから始める。午前中は、ストレッチを兼ねた簡単なヨガから、身体遊びの様々なワークを行う。昼食休憩をはさみ、午後からはペアやグループでのワーク。最後に簡単な振付で生徒全員で踊り高揚感や一体感を共有する。個々の身体に集中する事から、他者の身体に意識を向け、最後に全員で踊る事の楽しさを味わってもらう。生徒たちは、学校から離れた場所にお弁当持参で集合し、朝9時から15時まで多くの人にとって初めてのダンスを体験するという、少し非日常の時間を過ごすことになる。

〔ワークショップの例〕

- ◎手や足の指を伸ばし身体の可動域を広げていく「指ヨガ」
- ◎音楽や掛け声に合わせて動く・止まるを繰り返す「ストップ&ゴー」
- ◎ひとりの指の動きをもうひとりが追いかけるワーク(ペア)
- ◎交互に手のひらで相手の身体に触れるワーク(ペア)
- ◎ハロウィンをテーマにお化けや怪獣を動きのイメージのためのモチーフにした「モンスターダンス」。簡単な振付の他に、登退場や細かな演出を考え一つの流れのあるダンスにしていく。

子どもたちの様子に合わせたワークの変化

- ◎始まる前はダンスと聞いて気恥ずかしそうにする生徒が多かった。→アーティストのウェルカムダンスを見て、楽しそう、すごいという感想が上がり、戸惑いつつもやってみようという雰囲気が生まれた。また、身体を動かすことで緊張もほぐれていった。
- ◎集中しきれておらず、友達とふざけてしまう子が多い。→アーティストが言葉だけではなく、身体の動きも合わせて、静かに音を立てないようにすると集中の必要な場面であることを伝えると、生徒たちもそれを受け入れていく姿が見られた。

◎普段の仲の良い友人とばかりペアを組んでしまう。

→アーティストや先生から、違うクラスの人や普段あまり話さない人ともペアを作ってみて、と声をかけられると、徐々に変化が見られた。またアシスタントダンサーと積極的にペアを組む子も現れた。

◎最後のモンスターダンスでは、演出をつけられる体験をした。→演出がつくことで、一気に作品らしくなった自分たちの踊りに、生徒たちも嬉しそうであった。全員でひとつのダンスを踊る、という体験に驚きと楽しさを感じている様子があった。

終了後の教員との振り返り(抜粋)

参加：浅見先生(北大路中学校)、隅地、阿比留、佐藤、鈴木、西岡、新原(敬称略)

浅見：メリハリがつけられず、集中できない子が多いため静かに参加してくれるか不安だったが、アーティストの声のかけ方であんなにも集中できるということに驚いた。雰囲気作り方というか、どう進めていくか次第なんだと感じた。目標であった、仲間と頑張るとか、社会の一員としてルールを知るところも達成できたように思う。なにより、ダンスの入り口を開いてくれたことが嬉しい。

隅地：先生が仰っていたように、たしかに幼い印象は受けた。けれど、その幼さは裏を返せば素直であるということ。ワークショップの途中でやめて出ていってしまうような生徒さんはおらず、みんなダンスの場と時間を楽しんでくれてよかった。また、どうしようか迷っていても動く際のポイントを伝えればすぐにできる子たちばかりで、身体を動かす感覚が鋭い子が多かった。

阿比留：みんなずっと笑顔だったことが印象深い。指名して前に出てきてもらうときも、照れたり恥ずかしがったりしながらも、真剣にやってくれることが嬉しかった。

佐藤：好きにやってね、と言われるとどうしてよかわからず、アシスタントの後ろについて回る男の子たちもいたが、萎縮するばかりではなく、分からないなりにダンスを楽しんでくれたように思う。

(報告：新原)



北大路中学校 担当教員

(1)成長していく子どもたちに身につけてほしい力・伸ばしてほしい力

◎苦手意識や先入観にとらわれて早急に諦めるのではなく、広い視野で何事にもチャレンジし、自ら経験しようとする気持ちの育成。

◎困ったときに、一人で悩まず周りに助けを求められる力や、自分の思いを表現し、仲間や周りの人と助け合いながらお互いに成長しようとする力の育成。

(2)ダンスの活動を通して感じた子どもの変化など、ダンスの活動に関する感想

◎いい意味で他人に合わせることのハードルが低くなった。また、同時に自分に合わせてくれることや、自分を尊重してくれることに喜びを感じ、強い者が少し優しく、弱い者が少し活動的になった。

◎自分から進んで手をあげたり、苦手なこともやってみようとしたりする様子がみられた。

◎「めんどくさい」「何それー?」と、マイナスなイメージを持っていた子どもでも、「やってみると楽しかった」「思っていたより良かった」などの、プラスの感想を持つことが多かった。そのため、「何事も挑戦してみることが大切」という考えを持てた子どもが多くなった。

ナビゲーター セレノグラフィカ

中学一年生4クラス総勢131名。男女比およそ1:1。まずはナビゲーター2名とアシスタント3名の自己紹介から始めた。どうやってダンスと出会ったのか、なぜダンスで生きているのか、5人5様のエピソードと身体観に、生徒たちはとても集中して耳を傾けてくれた。この段階で、良い時間になるだろうと確信。ワークは身体の細部への気づきへの促しからスタートし、ペアワーク～ゲームダンス～動きのトレース～演出も含めて一曲踊り切るラスト。学校ではない場所に皆でお弁当を持って出かけ、普段は出会わない人種に指導されての9:30-14:40。ジェットコースターのような半日だからこそ楽しめるのだろうと思った。非日常感の持つ利点を活かしたプログラムとでも言おうか。ワークの時間が進むごとに「自分から動こう」という意思が身体に反映されていくのが如実に見え、このような活動が行事化することの可能性も感じた次第である。

生徒の感想(まとめ)

Q.体験してみての感想、または発見したことを教えてください。

◎あまり話さない人とも交流できたことがよかった。※複数回答あり

◎自分の気持ちを素直に表現することが楽しかった。

◎人で踊るのではなく、みんなで踊るというのがとても楽しかった。

◎指のストレッチをしたら見える範囲が広がった。

◎あんまり話したことのない人とペアを組んで、この人といったら楽

しいなーと思った。

◎友達と一緒に自分からダンスを楽しんだことを、自分としてはすごく頑張った。

◎普段話さない人と一緒にペアを組んで、自分から誘えるように頑張ったけど、先に他の人に誘われてしまったので、次は自分から誘えるようにしたい。

◎創作ダンスは自分の個性を見つけることができるし、何にも捉われないダンスは踊っていても見ていてもとても楽しかった。ゾンビのダンスは恥ずかしがらずになりきることを頑張った。

◎静かにして、「からだの雑音を消す」ことを知りました。

◎楽しみ方は人によって違うけれど、楽しもうとすることが大切だと知った。

◎自分で自由に身体を動かすことが意外と楽しいと知った。

◎できると思えばできる、ということを知った。

◎決められた道に縛られずに自分らしいことがあってもよいということを知った。

◎友達のいいところを発見できた。

Q.今回の体験をこれからの生活にどのように活かしていこうと考えましたか

◎コンテンポラリーダンスは正直ださいと思ったけど、自由なダンスを人の前でできることはすごいし、色んな人に紹介出来ることは当たり前そうで難しいことだと思いました。僕は人見知りで人の前では受け身になっていたけど、ダンスを通じて人の前にできることは恥ずかしくないと思いました。だから色んな事にチャレンジして、人の前に出ることはカッコいいことなんだと思える自分であり続けたいです。

◎今回の体験で、一人が静かでも誰かが喋っていたら一つにまとまらないし、一人がよりよい学校・学年・クラスにしようとしても絶対一人では変えられないし、全員でやることでよりよい学校・学年・クラスになると思いました。学校や学年では前に立って言うのは難しいけど、少しずつクラスに声かけなどをしていきたいです。

◎1年生でまだ喋ったことのない人たちがたくさんいるから、その人たちに積極的に話しに行って新しい友だちを増やしたいと思いました。でも、僕は喋ったことのない人とコミュニケーションをとるのが苦手だから、校外学習で学んだ自分らしさを出して少しずつでいいから、喋ったことのない人たちとたくさん喋って、優しく接して、友だちを増やしていきたいと思いました。

アーティストプロフィール



photo: Ai Hirano

セレノグラフィカ (隅地兼歩・阿比留修一)

ダンス

関西を拠点に国内外、屋内外を問わず幅広く活動を展開するデュオのダンスカンパニー。多様な解釈を誘発する不思議で愉快な作風と、緻密な身体操作から繰り出されるダンスで多くの観客を魅了している。公演・WS・セミナー等、ダンスと旺盛に関わり、全国各地を駆け巡りながら「心と身体に届くダンス」を伝える日々を送る。



康本雅子

ダンス

ダンサー・振付家。1974年生まれ。自身のダンス作品を国内外で発表する他、演劇やミュージックビデオや企業広告などの振付など、多岐に渡るジャンルにおいて活動している。また小学校でのワークショップや、ミュージシャンとのライブなども多数行なっている。



東野祥子

ダンス

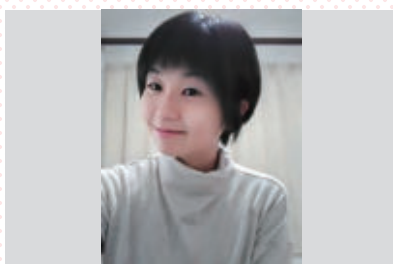
ダンサー・振付家。類稀なる身体性を駆使し、先鋭的な舞台作品を多く発表。15年に「ANTIBODIES Collective」を結成。多ジャンルのアーティストと共に、大掛かりな舞台作品やパフォーマンス、インスタレーションなどを多数制作。また、学校・福祉施設などで様々なアウトリーチを行い、ファシリテーターとしての活動にも力を注ぐ。



鈴木英理子

ダンス アシスタント

5歳からモダンバレエをはじめ。大阪芸術大学舞台芸術学科演技演出コース卒業後、役者・ダンサー・振付家として活動。長女の出産を機に、京都で「チチカカコ」を立ち上げ、親子ダンス作品をつくっている。



花沙

ダンス アシスタント

幼少より身体表現に興味を持ち、神戸大学発達科学部人間行動・表現学科、同大学院にて舞踊教育学を修める。在学中よりコンテンポラリーダンスの活動を始め、様々な作品を踊る。立命館大学非常勤講師(体育・ダンス)



合田有紀

ダンス アシスタント

07年-17年MonochromeCircusに所属し、国内外問わず多数の作品に参加。15年「ゴード企画」立ち上げ。パフォーミング・アートにまつわる様々なワークショップ、イベント、公演等企画し、「踊り」と「場作り」を並行して行っている。



西岡樹里

ダンス アシスタント

ダンサーとして、セレノグラフィカ、砂連尾理、チョン・ヨン・ドゥ、余越保子などの作品に出演。自身でダンス作品の製作・振付も行う。2012年より福祉専攻科エコール神戸にてダンスの講座を担当。



佐藤野乃子

ダンス アシスタント

18歳で舞踏の道を志す。約7年間、舞踏カンパニー倚羅座で制作兼舞踏手を務める他、「人と舞踏の豊かな出会いを広げたい」という想いを胸にソロとしても活動。KYOTO舞踏館新人公演「はざま」出演。



こちかぜキッズダンス 2018



こちかぜキッズダンス 2019